

報告タイトル

1960年代の日米間における「近代化」論争
—箱根会議における価値体系と歴史認識をめぐる断層—

“Debates on Modernization Theory between the United States and Japan in the 1960s:
Discrepancies in Value Systems and Perspectives on History at the *Hakone Conference*”

氏名(所属)

藤岡 真樹(京都大学)
FUJIOKA Masaki (Kyoto University)

要旨(800字程度)

アメリカ合衆国(以下、アメリカ)からもたらされた「近代化」に関する議論に日本が接した初期の機会の1つに、箱根会議という国際会議があった。1960年8月末から9月初旬に開催されたこの会議には、アメリカ、イギリス、オーストラリアの大学で日本研究に従事する研究者と丸山眞男や高坂正顕など日本の研究者ら、総勢34名が参加した。

箱根会議をめぐる先行研究は、(1)アメリカ側研究者が箱根会議や1960年代の日本に持ち込んだ「近代化」論は、日本側研究者に受け入れられたわけではなく、1960年代を通じて日米間の論争の種になったこと、(2)日本側研究者がアメリカ側の「近代化」論に懐疑的で論争にまで発展したのは、アメリカ側研究者が、当時の日本側研究者には共産主義が広く浸透していると考え、それを徹頭徹尾否定する姿勢にあったこと、(3)1960年代後半以降、ホールらの「近代化」論は、ダワーらひと回り若い世代によって、アメリカの論壇にて否定されていく、という3点を明らかにしてきた。

こうした先行研究の成果を踏まえ、本報告は、まず(1)と(3)、すなわち、箱根会議および1960年代の日本人研究者と1960年代後半から1970年代にかけてダワーらアメリカの日本研究者の批判との間にいかなる共振性ないし共鳴性を見出しうるのか、を確認する。そのうえで、(2)の視点を導入した考察をめぐる。かかる作業を通じて、本報告は、「近代化」論を日本に根づかせんとするアメリカの意図が、それをめぐる1960年代の日米間の論争を契機として、アメリカ内で「近代化」論とともに否定されていく過程、別言するならば、「近代化」論のアメリカへのブローバック的影響(アメリカ側が予期せぬアメリカ側への影響)を思想史的視点から解明したい。

以上